相手との親密度が対人間の空間距離知覚に及ぼす効果

○大藤弘典

(広島国際大学)

キーワード: 空間距離, 距離判断, 親密度

Effect of familiarity on judgment of interpersonal spatial distance

Hironori Oto

(Hiroshima International University)

Key Words: Spatial distance, Judgment of distance, Familiarity,

目 的

対人距離の研究に見られるように, われわれは親しい相手とはより近い距離で, 初対面の相手や親しくない相手とはより遠い距離で接する傾向がある。同様の親密度と距離の関係は, 「身近」「疎遠」といった言語表現においても見られる。本研究では, このような日頃の対人経験が, 自分と相手との空間距離の「知覚」に影響を及ぼすかどうかを検証することを目的とする。空間知覚の文脈において, Thomas, Davoli, & Brockmole (2014) は, 相対する人物が自分の競争者の場合は, 相手までの距離がより長く, 協力者の場合は距離がより短く判断されるという結果を報告しており, 社会的な立場の違いが空間距離の知覚に影響を及ぼすことを指摘している。しかしながら, 対人間の親密度のように, 社会的な関係性の強さの違いが空間知覚に影響を及ぼすのかという点については, 明らかでない。本研究では, この問題について, 親密な相手ほど, 自分とその相手との空間距離が短く知覚されるという仮説を立てて検討を行う。

方 法

実験参加者 広島国際大学の大学生 26 名 (男性 20 名, 女性 6 名) と, 実験協力者として女性 2 名が実験に参加した。実験協力者は, 課題を行う際の人数の調整のために追加された。また, 日常生活の中で形成される対人間の親密さの違いに焦点を当てるため, 実験参加者は皆, 長期にわたり授業や大学行事などで行動を共にしてきた同じ学科の 3 年生の中から選ばれた。

実験場所 実験は体育館で実施された。

材料と課題 ペアになった参加者同士を, 実験者が設定した距離を空けてお互いに対面する形で立たせるため, 立ち位置を示す長方形の木片のバー (約 4.5cm×20cm) が 30 個, 用意された。バーは 2 つ一組の 15 組に分けられ, 2 列で横並びに床に設置された。各組のバー間の距離の設定は, 80cm~360cm の間で 20cm 刻みに変化させた 15 種類を用いてなされた。また, 距離判断の際, 体育館の壁に設置された物同士の間隔や床板の模様が手がかりとして使用されることを防ぐため, バーは壁や床板に対して斜めに設置された。また, 対面した参加者がお互いの身長およびお互いの空間距離を記入する記録用紙, ならびに親密度を 10 段階で評定させる評定用紙が用意された。その他, 実験参加者に基準距離を示す際にビニルテープが使用された。

手続き 実験は, 授業の一環として, 全参加者を体育館に集めて一度に実施された。最初に距離判断の手順について説明があり, 実験参加者は, 床に置かれたバーの縁につま先をつけて起立し, 自分と正面のバーに立つ相手とのつま先間の距離がどのくらい離れているかを判断するように伝えられた。次に, 基準となる距離を学習するため, 彼らは体育館の壁から 1m 離れた床に壁と並行に貼られたビニルテープの縁につま先を立てて横並びに立った。その状態で, 彼らは現在の自

分のつま先から壁端までの距離が 1m であることを伝えられ, この基準距離を憶えるように指示された。その後, 実験参加者は 2 人 1 組の 14 のペアに分かれ, 2 列で横並びに置かれた 15 組のバーの一方の端につま先をつけ, お互いに対面する形で起立した。その状態で, 最初に相手の身長を, 次いでお互いのつま先間の距離を判断させ, バインダーと一緒に配布した記録用紙に記入させた。身長の判断は, 参加者が対面する相手の足下だけを見ることを防ぎ, 対面する相手を良く見ることが促すために実施した。判断を終えると, 各参加者は同じ列の右横のバーに 1 つ移動し, 対面する相手を変えて, 再度, 判断を行った。この際, 列の右端のバーに立っていた参加者は, 同じ列の左端のバーに移動した。このような手順で, 参加者は 15 回のローテーションを繰り返し, 対面する相手がいなかったために休憩とした 1 回を除く, 計 14 回の距離判断を行った。距離判断を終えると, 参加者は, 初期位置のバーに戻り, 最初にお互いに距離判断を行った相手と再び対面した。実験参加者は, 距離判断を行ったときと同じローテーションで対面する相手を交代しながら, 相手との親密さを 10 段階で評定した。

結果と考察

距離判断の用紙の記入漏れや記入の仕方に誤りがあった男性 4 名はデータ分析から除外された。参加者ごとに平均判断距離 ($M=199.6$, $SD=36.0$), 判断距離から物理距離を引いた絶対値を平均した平均誤差 ($M=44.2$, $SD=17.2$), 平均親密度 ($M=6.1$, $SD=1.4$) が算出された。その上で, 参加者全体で平均親密度と判断距離の間の相関の強さが求められた。本実験では, どの参加者も, 15 種類の距離判断のうちのいずれか 1 つは休憩したため, 個人事に判断を求められた物理距離の平均が異なっていた。そのため, 両者の関係の強さは, 平均物理距離を制御変数とする偏相関係数として示された。その結果, $r(24)=-.12$, $n.s.$ となり有意な相関は見られなかった。したがって, 全体分析の結果は, 本実験の仮説を支持しなかった。

全体分析のデータには異性同士の距離判断のデータも含まれていた。この場合, 参加者が異性を注視しすぎないという暗黙裏のマナーや異性に対する恐怖心によって, 距離判断が適切になされなかった可能性が考えられた。この可能性を考慮し, 試みに, 人数が少ない女性 5 名を除く男性 16 名について, 男性同士で距離判断と親密度の評価を行ったデータのみを抜き出して, 再度, 両者の偏相関係数を求めたところ, $r(14)=-.58$, $p<.05$ となり, 中程度の有意な相関が示された。この結果は, 相手との親密度が高いほど対人間の空間距離が短く判断されたことを意味している。以上を総合すると, ある人物に対する親密度は, その人物と自分との間の空間的な距離の知覚に影響を及ぼしていると推測され, 適切な判断を妨げる要因を除くことでこの影響が観察されやすくなると考えられる。